

Title	海外日誌(十七)
Author(s)	山本, 一清
Citation	天界 = The heavens (1924), 4(42): 238-243
Issue Date	1924-06-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/160081
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

海外日誌 (十七)

Harvard College Observatory,
Cambridge, Mass., U. S. A.

山本一清

十一月十四日(水)

昨夕、停車場から送り届けられた荷物類の中、書類等を皆天文臺に運ぶ。それから市街を散歩。ふさパークレー通の公園に近い所、ミセス・ワルコト方にキチン付きの好い室を見付け、来る二十六日よりそれを借りるさ決め、約束した。次で廣場のハーバード・トラスト銀行に弗の保管を委託し、之れで總てが落付いたわけだ。

十一月十五日(木)

朝九時半から天文臺でシヤプレイ、カンベル、ミス・カノン諸氏と今後の研究方針について相談。其の結果、自分は夜間二十四時對物プリズム鏡と十五時光度計とを使用し、又、隨意に十二時極軸望遠鏡を使用すること、書簡は不規則變光星の寫眞光度を測定することに決定した。ミス・カノンは早速アンドロメダ座の星の材料をくれる。

正午、シヤプレイ方で兩人午餐に招かれ、英子は日本服を着た。夕方、セントラル廣場まで散歩。

十一月十六日(金)

午前中、カンベル氏に十二時極軸望遠鏡を見せて貰ふ。A館の南向きの階上の窓から南極の方向に十二時の望遠鏡を突き出したもので、觀測者は暖かな室内に心地よく座したまふ、全體の筒の運轉を操つて、筒先の平面鏡によつて北極三十度以内を除く。全天の觀測が出来るやうにしたものである。實に便利至極な機械である。之れならば變光星觀測者の能率は十倍も上がる。と思ふ。

今日は天が厚く曇つて、室内は始終燈火をつける。三時頃から又々二人で散歩。

十一月十七日(土)

午前中、キング教授に二十四時プリズム鏡の使用法を説明して貰

二六

ふ室の設備が悪い、キークリスの二十四時には全く比べられないやうに思ふが、しかし此のプリズムの大きさには驚いた。午後、又、ホストンへ行き、下町を散歩。アトランチック街の家さの間から、始めて太西洋の波を見た。夕方大急ぎ天文臺に歸りキング教授と共に南天の星のスペクトルを撮影、傍でホイ氏は例の有名な一時クク・カメラで廣角天體寫眞を撮つてゐる。

今夜、ミス・カノンが來訪せられたと、英子の話。

十一月十八日(日)

朝れをして、十一時漸く向ひの教會の禮拜に列した。

午後、ハーバード大學のヤードを散歩した後、フオレン通りにブラツク氏を訪問、同家一同自動車で、ケンブリヂ、ブルクラインの街々をドライブし、四時半送られて歸宅。

十一月十九日(月)

アンドロメダの星の寫眞光度を測る。

夕食後、ジェフアソン實驗場の談話會に出席して、ジェフア氏の原子構造に關する講話を聞いた。その歸り、途上で醉漢に出會ひ「おまへはニケルがダイヤモンドを持ち合せないか」と聞かれて、ぎよつとした。用心々々。

今夜は珍らしく澄んだ好い晩である。寫眞は月の光で駄目であるが、十二時で變光星を觀測した。

十一月二十日(火)

お晝少し前、ミス・ウツに知らされて、外に出て見ると、ホストンの空から此方へ向け、大きな飛行船が浮んで來てゐる。今朝ニエツヤツから來たシエナンドー號である。誰もかれも珍らしがる。

十一月二十一日(水)

天文臺で相變らずアンドロメダの星の寫眞板を測る。

夕方、招かれてブラツク氏方で夕食をいただく。それから暫く市街を散歩して歸宅。

低氣壓の來る前で、非常に暖かい。

十一月二十二日(木)

アンドロメダの星の寫眞光度の一九一〇年以來のもの測定終了之れをカーヴに寫したところが、一九一四年以來約五百日毎に最大光輝が表はれてゐて頗る面白い。

今日も暖かい。遂に夜ふけて雨。

十一月二十三日(金)

朝、アンドロメダのZ星の光度曲線をシヤブレイ、ミス・カノン兩氏に見せたところ、大に喜んでくれた。

午前十時から、兩人でホストンへ行き、シモンズ・カレツツにミス・グリムセウに面會、いろいろ學業の模様など聞く。それから下町の書店二三箇所を訪ひ、夕方帰宅。

夜、ミス・カノン宅を訪れたが、主人は不在で、ミス・シヤープのみ居た。

十一月二十四日(土)

ミス・カノンは又艦RX星研究の材料をくれた。

午後、アンドロメダ座Z星の一比較星の變光を發見した。

今日は午後二時からハーバードミエール兩大學のフトボール仕合がある筈で、市街は一般にさはいでゐる。自分が入場券がないので行かないが、正午頃、廣場まで出て、其の素晴らしい景氣を見た。折から天氣は雨のどしや降りであるのに拘らず、男女の別なく、又老少の別なく、皆赤青の旗を手にして、仕合場に急ぐ光景物凄いばかり夕方再び廣場に出て見る。仕合の結果、十三對(でエール大勝利。

十一月二十五日(日)

朝からホストン行き、十一時から有名なトリニテ教會の禮拜式に列席。會々東京から歸來したライフスナイダー師の大震災に關する説教をきく。

午後は教會の向ひの公立圖書館に入つて、建築や内部の裝飾など見、三時から「ホストン市」なる通俗講演をきく。

十一月二十六日(月)

バークレー通りへ移轉で、朝から荷作り、午後一時、トラックを雇つて、全部を運び終る。午後は市場で食料品の買物をなし、夕食には始めて米の飯をたべた。但し醬油なしの料理である。

午後五時、ジェファソン實驗所の談話會に出席。題はボーア氏の原子論。

東京の福永重勝氏より來信。大災難の中に「天文と人生」其の他二三の著書紙型が救はれたとあつたので、大喜び。

十一月二十七日(火)

朝からセントラル廣場へ二三の家具類の買物に行き、尚、シンガー製新式ミシン一臺を買ふ。英子ニコ。

午後、天文臺で艦座RX星の光度測定を始む。午後八時から天文講演會にライデレン君が「星の運動」を講演し、英子はそれなきいたが自分は、其の間十二時で觀測してゐた。

十一月二十八日(水)

不思議に今の室に移つてから朝起きになつた。今日も七時半には起きて、掃除、食事、それから自分は天文臺へ行く。室では、艦座RX星の測定を續ける。

午後一時から、兩人でホストンへ行き、ハンテントン街のオペラ館でアーテン・ハービーのエデボス劇を見る。ギリシヤ劇を見るのは自分は今が初めてであるが、場所は好し、俳優は好し、何もかも好して、四時終了後の感じは非常に好かつた。流石にハービーの藝だと思はしめた節は多いが、眼の表出に少し憾みはなかつたが。

プリンストンのJ.N.ラッセル教授よりクリスマスの招待狀來る。横濱の大庭夫人より手紙來る。地震が細かく書いてあるのを讀んで、涙を以て、其の日の光景を想像する。

十一月二十九日(木)

今日は感謝日で米國の休日である。自分等も其の心持ちで朝は朝れ、それから新聞を見たりして半日を費す。

午後、好天氣を幸ひ、外出。地下線で南ホストンへ行き、コロンビア街に沿ひた舊港の景色を眺めつつ、散歩してマリン公園まで行つた。しかし冬の事ではあり、店は閉ちられて、夏の景氣は無い。水族館で西洋の魚たちに多く面會し、夕方元の線によつて歸宅した。

十一月三十日(金)

午前中、天文臺で例のRX星測定。

午後一時、晝食を終つて天文臺の入口に來て見るさ、ウイリッソンのエラーマン氏と夫人と令嬢とが居られた。一別以來の挨拶、それから室内に案内して、取り敢へず、シヤブレイ臺長の家へ取り次ぐ午後四時からエラーマン氏の來訪を機として集會室で御茶及び談話會が開かれ、大學々生天文臺のステツソン氏やエニスレイ女子大學天文臺のダンカン氏等もわざわざ來集。英子も列席した。總勢三十名、婦人が過半数。そのわけは、ギリシヤ氏に據れば「婦人は一般に閑なから」であるそうな。會で先づエラーマン氏

「ワイルソン山天文臺の一般及び特に太陽面の水素團^{ボルン}について」次でシヤブレイ氏は

「宇宙構造に關する研究結果について」

それ／＼興味ある講話をし、二三の質問あり。あそこは米國式のさばけた社交會となつた。其の間窓外の天氣は急に嵐し化して歸途は物凄かつた。

十二月一日(土)

午前四時少し前、元同志社女學校に教へてゐたミス・エールが訪れて來られた。久しぶりなので大喜び、二時間ほど話したが、ミスは日本の話、支那の話、航海の話、メー州旅行の話、東京地震の話、それから英語の發音法に至るまで、あらゆる事を話された。日本語でならば三日ぐらゐの話材を。

夜は二十四時でミラ星のスペクトルを撮影。

十二月二日(日)

朝十時半からケンブリヂ第一會衆教會で禮拜。此の教會は一六三六年創立である。

午後二時からボストン行き。マサチューセツ停留場でドクトル増原氏に迎へられ、案内されて、クインズベリ通の同氏宅へ行つた。夕食には日本食をいたゞき、八時頃、藤原唯義氏と同道、ケンブリヂに歸る。

十二月三日(月)

艦座RX星の測定が終つて、午後、光度曲線を書いて見た。一九一七年以來は大して變化はしてゐないが、小さい變光の中にも著しい特色はある。

夕方、ジェファソン實驗場へ物理學談話會に行く。題は「ボールの原子論」で、ケンブル氏が説明した。

英子は今日始めて、獨りでボストンへ買ひ物に行く。

十二月四日(火)

艦座RX星の結果をミス・カノンに見せた。次は駁者のAB星にさしかかる。

今夕から始めて、毎週火金の二日づつ、ボストンのローエル學院で、通俗講演に、ハーバード大學のビルクホフ教授が「相對原律の起原、性質及影響」を講演するので、自分も聞きに行く。天文臺の連中も、キンガ教授を始め、多數聴講する。今夕は第一講で「エ

トクリド、ニウトン、フアラデー、アインシュタイン」といふ願であつたが、幻燈入りで、派手なやり方であつた。

十二月五日(水)

午後二時から、ボストンのオペラ・ハウスへ大評判のマーテン・ハーゼーの「ハムレット」劇を見に行く。ラインハルト式で、中々、變つた珍らしい點が多かつた。幽霊の出る暗夜の景や、大詰ハムレット埋葬の舞臺など深い印象を残した。夜警の場の星空の表はしも面白かつた。

夜、天文臺では通俗講演會に、シヤブレイ臺長が「地球の起原」を話した。

十二月六日(木)

終日、天文臺のC館で駁者座AB星の光度を調査する。

夜はブラツク氏へ行き、留守番を頼まれ、其の間、書齋でウェステイニングハウス製のレデオにより、ボストンの音樂會をきく。

十二月七日(金)

夕方五時、約束によりベッドレー氏の訪問を受け、案内せられた、汽車により、オーバーンデールの同氏宅へ行き、晚餐を頂く。同宅には、やはり日本傳道から歸米せられたケリー氏夫妻も居られ、大變愉快な會合であつた。食後、いろ／＼日本のことなど話した後、ケリー夫人及び令息に送られ、自動車で歸宅。

コペンハーゲンから、リード・韓星はダレスト韓星だといふ電報が來た。

十二月八日(土)

夕食後、ボストンの園藝館内に開かれてゐるレデオ共進會を見に行く。一人五十仙づつ、の入場料には少なからず驚かされたが、内部の陳列は可なり有益なものであつた。殊に別室で見せられたレデオの活動寫眞的説明は非常に巧みに出来てゐて、活動寫眞的教育的效果に今更感心した。

夜、ミラ觀測。

十二月九日(日)

朝十一時からアバントン會堂で禮拜、有名なフォステク氏の説教を始めて聞く。會堂がせまいのに、平生以上の大入りで、自分等は終りまで立ちづめであつた。

午後二時から、約束により、ミス・カノン、ミス・ペインと四人連れて、汽車でウエスレイ女子大學の天文臺へ招かれて行く。三時頃着。ダンカン臺長に迎へられ、雨の中を、暫く、大學のキャンパスや諸種の建築物を見あるき、最後に天文臺の内部を詳しく見る。教授用設備が好く出来てゐる。ハーバードを真似た四時の極軸望遠鏡もあつた。午後四時過ぎから臺長宅でテイの會が催され、臺長の特別厚意で、此の女子大學に在學中の日本學生七人全部も招かれて集まつた。一時間あまり、日本語でいろいろの話をする。六時半發の汽車で歸宅。

十二月十日(月)

アンドロメダ座Z星の研究結果をタイプして臺長に報告。午後五時より例の物理學談話會、シエファ氏がタウンスエンドの電子の平均自由通路論をよむ。

夜七時から、ハーバード・ユニオンでフォステクの宗教講演「基督教とは何ぞや」をきいた。そして、内容が單に宗教道德的アピールであつたので、多少失望した。講演後の自由質問と其れに對する應答は少しく面白かつたが、要するにアメリカの現代的宗教と、青年學生の傾向に關する一消息を知り得たのみ。——今更、米國基督教の異端的傾向を悲しく思つた。

十二月十一日(火)

終日、天文臺で研究。夜は八時からローエル學院でビルクホフ氏の相對論「重力の新舊論」をきき、歸つて觀測。

十二月十二日(水)

取者座A B星の光度調査一先づ終る。さにかく、之れも變な星だ時々はアルゴル型のやうに急激で、又、或る時はミラのやうに漸進的だ。

夜、觀測して、白鳥座S S星が増光し始めたのに氣がついた。

十二月十三日(木)

朝からハーバード・スクエアへ兩人で買物に行く。明日の御馳走の準備である。それから自分は天文臺へ行つて取者座A B星の局部的光度曲線を書く。夜八時から、天文臺では通俗講演會。キンカ教授が「望遠鏡歴史」について話す。藤原氏も來聴せられた。

十二月十四日(金)

今日は自分等の結婚滿十年に當る日なので、紀念の午饗會を催す。ささし、二三日以前から、いろいろ準備してゐた。いよいよ、今日、午後一時、自分はシャブレイ夫妻、ミス・カノン及びギリシユ教授を案内して宅に歸り、一時十五分はから食卓を開く。食事は純粹の日本食で、箸を用ふる。英子は日本服で接待した。シャブレイ、ギリシユ兩氏は流石に紳士で少々厚かましくもやつてのけたが婦人連は大弱り。シャブレイ夫人はおすし一皿にもあまして見えた。——一時間ばかり食卓は大騒動であつた。

夜八時から例によりローエル學院でビルクホフ氏の相對講演「相對論の實驗的研究」講演者は數學家なので此の方面は餘り得意でないらしい。

十二月十五日(土)

昨日あたりから急に寒くなつた。

十二月十六日(日)

夜、兩人でコンモンエルス街のミス・シャウツドを訪問。朝れして十時に起きた。

午後四時から工業學院で開かれる講演會に行き、シャイマー氏の「地質學及び放射物質より見たる地球の年齡」をきく。結論は、波濤岩層から判斷すれば地球は一千二百萬年以上、生物進化よりすれば四十億年以内、放射物質より研究すれば約二千億年といふのであつた。

十二月十七日(月)

まだ、取者座A Bの光度曲線で忙がしい。

天文臺の西隣りのセント・ポール教會では創立七十五年で、それを祝ふため、此頃毎夜六臺のサーチライトを點じて教會堂と高塔のイルミネーションをやるので、天文臺の方では、空が明るくて、觀測が全く出来ない。

十二月十八日(火)

今日は夕食に日本式のすきやきをして、天文臺からライテン、メンセル兩君を招いた。ライテン君は箸の持ちやうを何所で覺えたものか頗る巧みで、日本食が大に氣に入つたさ見え、飯を四杯はいたもげた。メンセル君は、之れに反し、全くの始めさ見え、一ぱいの飯に持ちあぐみ、水をコップに四杯も飲んで總てを流し込んだ。

夜八時から、メンセル君と同道して、ローエル學院のビルクホフ相對講演「相對論の二三の奇論」をきく。

十二月十九日(水)

水澤の川崎氏から震災紀念の雜誌が來た。くりひろげて種々の感にふれる。

十二月二十日(木)

数日前からハーグロッド大學「新講堂」でダウシ學會主催の下に、宗教講演會が開かれ、英國ケンブリヂ大學セント・ジョン・カレッジのTRクロウア氏が「聖パウロ」といふ題で連續的に講演してゐる。始めから開きたかつたが、今夕暇を得て其の第四講「人としてのパウロ」をきいた。ひどいなまり英語で原稿を朗讀するので、わかりにくかつたが、とにかく、頗る詩的な講演であつた。

十二月二十一日(金)

午後四時半から臺長シヤブレレイ宅で年末のテイ・パーティーがあつて、兩人共出席。英子は新製のドレスを着た。

夜は八時からローエル學院でビルクホク教授の相對論最終講演「相對論の哲學的影響」をきく。彼ればやはり數學家だ。

十二月二十二日(土)

午前中、ホストンへ行つて、クリスマススの買ひ物。

十二月二十三日(日)

午後、駁者座A B星の光度研究を一先づ終る。

今朝はケンブリヂ廣場に近いユニテリアン教會でクリスマス禮拜を守つた。

夜、ホストンのミス・シヤウドの宅へ招かれて行き、折柄來合せた十人程の日本學生と共にクリスマススの前祝ひで愉快に打ち興じた。

十二月二十四日(月)

午前中、室住氏が熊本農學校長小池氏を案内して天文臺に來られた。外は珍らしい雪と風である。

夜七時からミス・カノンに連れられて、ホストンのビーゴン・ヒルの街々のクリスマス祝ひを見に行き、それからコンモンエルス街の聯合大學婦人クラブを訪れて九時半頃歸つた。

十二月二十五日(火)

朝、ブラツク、シヤブレレイ兩家へクリスマススの挨拶に行き、それからホストンへ行つて、増原ドクトルを訪問、次で公園からハンデ

ントン街、コロンパス街あたりを散歩して、夕方歸宅した。

十二月二十六日(水)

グサー女子大學に開かれる米國天文學會に出席のため、夕方五時單獨、家を出て、六時ホストン南ステーションからフオル・リバー特別列車に乗る。七時二十分、フオル・リバーに着。それから美しい客船ブリマス號に乗り換へ、ニウヨークに向ふ。航路はロング・アイランド内海を行くのだが、晝間ならば景色が好いだらうと思ふが、夜だから仕方がない。客は皆船内の室でねむる。椅子に腰かけたまま、居れむるものもない。

十二月二十七日(木)

朝六時半頃、船の窓から外を見ると、夜が少しく明けて來て兩岸の景色がホンヤリと見える。船は今ニウヨークに近い、せまい岸の間に縫ふてゐる。七時半、壯大なヘル・ゲートの下を通過。それから三十分ばかりの間に虹のやうな大きな橋の下を通過。五回、ニウヨークの盛んな高塔樓閣の景色を眺めつゝ、バッテリーの沖を大曲りして第十四突堤に着いたのは八時であつた。船は豫定より一時間遅れたけれど、之れがためニウヨークの全景を水上から恣まに所得したのは自分に取つて幸ひであつた。

下船後、直ちに高架電車で大中央停車場に行く。此の停車場に汽車を待つ間、ふさ大ホールの天井を見上げたところが、双魚星座から牡牛星座までの黃道星座が描かれてあるのを發見したが、其の描き方が左右全く逆になつて居り、只、オリオンとハイヤデスのみを正しく書いたために牡牛座の星々が二重に表はれてゐたりしたのを見て、あきれた。——ここは大アメリカの表玄関ではないか!!

さて、午前十時發のシカゴ行急行列車に便乗、十一時四十五分ボウキプシ市に着。電車でグサー女子大學に着いて、本館第四五四號室に入つた。そして取り敢へず天文會場のサンダース實驗場に馳けつて見れば、恰も午前の會が終つたところだ、一同今や表石段上に集まり、紀念寫眞を撮るところであつた。

午後三時から本館應接室で主人役ミス・フアネス教授自らテイをサーヴせられ、三時半から、又、午前に引き続き論文會があつた。晩餐午後六時。それから天文臺で非公式の社交會があつたけれど、自分は風邪の氣味なので自室に引きこもつた。

十二月二十八日(金)

朝起きて見れば、外は美しい雪が積つてゐる。食後、カメラを提げて飛び出し、天文臺を始め数枚の寫眞を撮り、十時から論文會に出宿した。昨日は論文會の座長はH N ラッセル氏であつたが、今日はE W ブラウン氏である。

午後は二時から天文臺の參觀をしたが、三時から、又、テイの會三時半から一同サンダース實驗場に集まつて、主として、一九二五年一月二十四日の皆既日食に關する研究及び討議があつた。此の日食には既設の天文臺が六ヶ所も皆既線の中に入るもので、皆、中々の意氣込みである。

夜、八時から、大集會場で又日食に關する特別集會があり、先づステビンズ氏が立つて、去る九月加州カタリナ島に於けるヤーキース天文臺遠征隊の幻燈講や活動寫眞を説明せられた。活動寫眞の中には自分も入つてゐた!! 次でスワースモア天文臺のミラー氏が、同じ年同じ日、メキシコのエルパネスに滞在して得た日食の寫眞やパターキネマの活動寫眞を見せて説明せられた。

十二月二十九日(土)

午前九時から天文臺の講義室に一同が集合して、ミス・フアネスを座長とし、天文教育について討議會が催された。ラッセル、シヤブレ、レイ、ミス・ビゲロー、スローカム、カーテス等が盛んに意見を吐いた、非常に有益であつた。

十一時半、會は全部終了、それから自分等は急ぎで荷物をさへ、タグシで停車場に駆けつけ、十一時五十二分發の列車に乗り、ニウヨークに向ふ。車中、ラッセル、ビゲロー、ローナー、シヤブレ、レイ等と同席して雑談。

午後二時、ニウヨーク市第二二五街停車場で自分は下車し、直ちにコロンビア大學の動物學教室に京都大學から來てゐられる駒井卓氏を訪ね、案内せられて、同大學構内を一巡。其時、この大學天文臺を見た。有名な此の大學の割には誠に貧弱なもので、七時ぐらゐの赤道儀室と、其れに附屬した子午線室があるばかり。人々は一便所と間違ひさうだ一と評してゐた。擔任のシヤコビー教授は目下アポレキシーで入院中であるやうな。

それから駒井氏の案内で、隣のユニオン神學校に魚木君を訪ね校内を一巡。次でハドソン河岸に出て、有名なグラント將軍の墓を

見物し、再び動物學教室に歸つて、荷物を持ち、地下電車で第一七三街の駒井氏宅に着いた。

夜は、長い間、世間話やら宗教論で、床についたのは十二時。

十二月三十日(日)

九時起床。駒井氏宅に案内せられて、下町のブロードエー會衆派會堂に行き、十一時からの禮拜に參列。有名なシェファソン牧師の歳末祝致(詩篇第十九篇をひいたもの)をきき、好い印象を受けた。それから、更に魚本、有架兩君を加へ、五人揃つて、第五十八街の一日本料理店で會食。後、有架、駒井兩君と自分だけは第七十七街の博物館を見た。中に、グリランド産の三十六噸の大隕鐵と、最近蒙古から掘り出した古代獸の卵の化石は見ものであつた。夕方、また、駒井氏宅で御厄介

十二月三十一日(月)

早朝七時、駒井氏宅を辭し、教へられた通りの電車によつて、東第五十九街の日本品店へ行つて、いろいろ御正月の眞物。それをカバンに詰め込んで大中央停車場に駆けつけ、十時發の列車に乗る。天氣は荒れ模様で、雪と雨とが寒い。

午前十一時四十七分、ニウ・ヘヴン着。電車によつてエール大學天文臺へ行き、先づ、臺長シレンシンジャー教授の宅に招かれて、午餐を饗せられた。それから天文臺の内外を臺長及びステルンズ氏に案内して貰つた。例のルーミス高塔及び天頂寫眞機が最も興味が深かつた。昔エールキンスが使つたといふ六時のヘリオメーターも見た。午後四時から、臺長は特に自分のために天文臺の一室で御茶の會を催され、席上、自分は日本の天文學界について一場の講話をした。

午後五時四十分發の汽車でニウ・ヘヴン發。同六時四十八分ハートフォード着。岩上、横田、兩兄に迎へられ、晚餐を頂いた後、神學校の客室に案内せられた。

夜は兩君の室で、茶をすゝりながら、除夜の長談議をする。

一九二三年度終り。